〔巻頭言〕

紀要から広がる看護実践研究

育成期看護学領域　服部 律子

本学は、県民の多様な保健・医療・福祉ニーズに対応するため県内の看護学教育・研究の中核的機関として設置された。研究活動においては、「看護実践の改善・改革」を本学の基本方針として推進してきた。教員は、県内の看護職との共同研究や看護実践研究指導事業を通して、看護実践の質向上の取り組みに関わり、県内全体として看護実践の質向上に貢献してきている。また本学の博士前期課程の研究活動として、現場の看護の質向上をめざして看護実践研究を推進してきた。

さらに看護実践研究を方法論として確立し、研究論文を大学紀要に公表する活動は、研究科の修士論文を公表できる論文としてブラシュアップする過程において、より洗練されてきている。現在までに修士課程修了生の本学紀要への看護実践研究の論文投稿数は着実に増加しており、今後も共有の知的財産を蓄積していくこととなる。看護は実践の中に意味があるのは看護活動の特質を考えると自明のことである。看護の質の向上を意図した研究であるためには、看護実践が人々の健康生活に与えるよりよい影響を見出し公表することが重要である。これからの時代の人々の健康生活の維持、向上には看護の果たす役割は決して小さくはない。そのためにも看護実践の意義を研究活動を通して伝えていくことは重要である。

本学の博士前期課程の研究活動として、混とんとした看護の現場から、看護実践の現状分析、利用者ニーズや看護職者のニーズ等多様な情報を分析し「看護実践の課題」を明確にする作業、「課題」の解決に向けた看護方法の創出と実践、さらに評価等のプロセスを踏む看護実践研究は、一つ一つの段階を重ねていく山登りにも似た取り組みである。修士論文作成もさることながら看護現場の改革を目指す学生の長期に及ぶ労苦に尊敬の念を禁じ得ない。看護実践や評価も研究データとして記述しなければならないが、量的なデータも質的なデータもあり、扱う事象の特性により多様な方法が想定され、従来の研究の枠を越えた重層的な活動である。

研究者自身が実践者であり改革者であるので、研究結果をまとめる時期において、修士論文を書き上げひと段落着いた達成感は感じられてもまだ研究者としての次のステップが残されていることに気がついていないことも多い。看護実践は、1回性のものであり修論で扱う研究はその施設での看護実践である。しかしそこで展開された看護実践研究の過程は、専門性の視点から分析され看護実践の意味が明らかになってくる。

対象者への看護援助がもたらすより良い影響は、形や数字になって見えにくいことが多い。対象者自身が「看護師さんの支援のおかげで」と表現することもなく、いや実際に良い看護は対象者に看護を気づかせないで、より健康な状態を作り出すのかもしれない。そのようなとても不明瞭な看護の意味を言語化して他者に伝えること、この作業が研究の最後の段階として最も重要で意義ある活動だとも言える。それが成果の公表ということとなり、本学紀要への掲載を修了生には勧めている理由である。

看護研究の目的は、社会で暮らす人々にとって看護がどのような効果があるかを明らかにし、人々の健康と福祉に資する働きになっているかを根拠とともに言語化するものである。これからの社会において、看護が役割をはたしていくことが豊かな社会の創出に繋がることになり、特に看護実践研究では、看護職である研究者が自身の看護実践から看護の意義を発信することにより、確かな根拠に基づいた普遍性をもつメッセージとなり看護の発展に貢献できると考えている。

看護の立場から社会に向けた情報発信はますます求められると同時に、看護実践研究の研究成果は、看護活動の本質に関わる意味を持つ情報として重要視されると期待している。